大衆社会における対話

marimo

2019 年 2 月 1 日

序論

本稿では，現代において用いられる「幸福」という言葉を，一貫して次の 2 つの意味に分けて用いる。1 つは，疲労に対する休息・回復に伴う受動的な幸福であり，もう 1 つは，社会において一定の役割を引き受けながら，自らの技術と努力で新たな価値を作り上げる能動的な幸福である。たとえば，ご飯を食べたり寝たりして肉体を養い休息させること，あるいは，ゲームをしたり映画を見たりして精神を休息させることは，すべて受動的な幸福である。受動的な幸福は，それ自体は一時的ではかなく，わずか数時間，多くてもせいぜい数日しか続くことはない（ただし，これは人生が続く限り何度も繰り返される。肉体や精神を休息させることは，人間が活動するために必要なことだからである。）。一方で，能動的な幸福は，社会のうちで新たな価値を創造する営みであるから，その幸福は長い持続性を持っており，ときにはこの幸福が一生続くことすらある。

第 1 章は現代における受動的な幸福に対する分析である。この章で我々は，現代の大衆社会においては受動的な幸福と能動的な幸福が混同されていること，そして受動的な幸福ばかりが賛美され，蔓延していることを目の当たりにするだろう。そしてその現象の背景には，現代人が抱える独特の「生きづらさ」があることを指摘し，その原因を明らかにする。

第 2 章では，現代社会におけるこの独特の生きづらさの原因を解決し，自由で風通しの良い社会を生み出すにはどのようにすればよいのか，これについて「対話」という側面から考察する。

本稿の執筆は 4Q の期間中という，ごく限られた時間で行われた。そのため，本稿は自分でも納得のいくまで内容を研ぎ澄まし，推敲することができなかった。とくに，§9 についての道徳教育についての言及は，内容が尻切れトンボになっていることは自分でも自覚している。一方で，本稿の内容が示す基本的な方針・目標については示すことができたと信じている。

第１章 大衆社会

§1 画一化へ向かう社会

労働社会

産業革命と分業の普及は，ほんらい大衆社会の誕生とは直接的なかかわりはないが，大衆社会の誕生とほぼ同時期に，労働社会と消費社会の誕生をもたらした。

産業革命以前の社会においては，人間社会において必要不可欠な時計や家具，法律といった制作行為はすべて熟練の行為であった。このもとでは，時計職人は時計を作り，パン屋はパンを製造して売る，といったように，それぞれの家庭および小規模の集団(companions)がそれぞれの技術を専門に持っていたために，それぞれの団体における制作行為は，少数の人間の手によって完成まで一貫して行われた。そのため，たとえば時計職人であれば，自らの手で時計を完成させるのは達成感があったし，自分が制作した時計が住民に購入されることはとてもうれしいことだった。このようにして，制作行為にかかわる人々は，自らの制作行為が社会に貢献している姿を目の当たりにすることができ，人間社会のうちにおける自らの立ち位置を確認することができた。このように，近代以前における人々は，階級制度のもとで個人的自由が奪われていたが，逆に言えば，彼らにはあらかじめ社会的な役割が与えられていた。そのため，その社会的秩序の中で自分に与えられた役割を果たせば，みずからが社会のうちの構成員であることを自覚することができた[1]。

一方で，洗濯，掃除，暖炉や煙突の管理などの私的な行為は，時計や家具，法律といった制作行為と違って，人間社会のうちに永続的なモノを残すことができない。さらに，これらの行為は毎日毎日延々とこなさなくてはならず，それゆえ，これらの作業を毎日こなすには，掃除機やストーブなどのきわめて便利な家庭用品が発明される以前には，相当の根気が必要だった[2]。そのため，古代ギリシャや中世までのヨーロッパでは，これらの仕事は主に奴隷によって行われていた[3]。

その後，産業革命によって機械技術が発展すると，安価で均一な製品を大量に生産することが可能になり，それによって制作行為の形態も大きく変わることになった。このうちもっとも大きな変化は，分業が注目されるようになり，熟練を要しない分業による工場労働者が劇的に増加したことである。このような変化によって，それまで高い熟練技術を誇りとしていた職人はこれまでの職を失うか，または制作会社（工場）が生み出す利潤のプロセスに協力するしか道はなかった。ところが，工場が生み出すのは職人独自の独創的な製品ではなく，安価で均一な大量の製品であったために，消費者の側も，制作会社のブランド名程度は気にすることはあっても，製品をデザインした職人の技術やこだわりまでをも気にすることは基本的になかった。以上のような理由により，前時代の職人は，これまでのように，自らの腕前に誇りを持つことは断念せざるをえなかった。なお，現代においても以上に述べたような状況は本質的に変化していないことは，2000 年から 2005 年までに NHK で放送されたドキュメンタリー番組「プロジェクト X」によく表れている。この番組のオープニング映像では，社会において称賛されるべき仕事をしながらも，誰にも注目されずに消えていく人々が映し出されているが，この番組が当時の中高年の男性を中心に一定の人気を得ていたことは，決して偶然ではなかった。

しかし，より重要なのは次の事実である。分業は，そこで働く工場労働者に熟練を必要としなかった。すなわち，分業が普及することは，同時に単純労働が普及することを意味した。というのも，分業のもとでの工場労働者は，最小限に分割された作業をこなせばよいのであり，それゆえ最低限の技能さえ身に着けてしまえば

利潤のプロセスに入っていけるからである。マルクスが，これまでにはなかった「労働力」という概念を自身の労働理論に導入したのも，ちょうどこの頃であった[4]。単純労働においては，「労働力」という共通の概念のもとで，すべての人間が「とりかえ可能な存在」だからである。今や現代日本では，学者や医者や研究者や芸術家などの一部の専門的な職業を除いて，会社の事務員や工場労働者など，多くの職業を「労働力」という同じ概念のうちで捉えることができる。現代人からみれば，このことはわざわざ語るまでもないくらい当然の事実に思えるかもしれないが，このことは少なくとも歴史的にみれば，現代に特異な特徴なのである。現代の子どもたちが，前述のような（医者や学者などの）専門的な職業に憧れるのも，根本的にはこのような背景があるのではないだろうか。

賃労働と分業を基本とした資本主義社会のもとで蔓延した「労働」という概念が意味することは，上記のほかにも別の意味があった。産業革命以前の制作行為では，たとえば前述した時計職人の例でいえば，時計を制作するという行為は，一人またはごく少数の人々によって協力して行われるために，自らが制作にかかわった時計が完成していく様子を本人が身をもって実感することができ，またそれによって自らの仕事に一定の区切りを見出すことができた。一方で，終わりのないベルトコンベアーのうえでひたすら同じ作業をしている労働者にとって，本人は一連の制作行為に参加しているという実感はまったくなく，ただひたすら延々と同じ作業を行っているようにしか思われない[5]。このような状況は，現代における事務作業等についてもよくあてはまるのであり，このことは，図 1 に引用した漫画がありありと描写している。

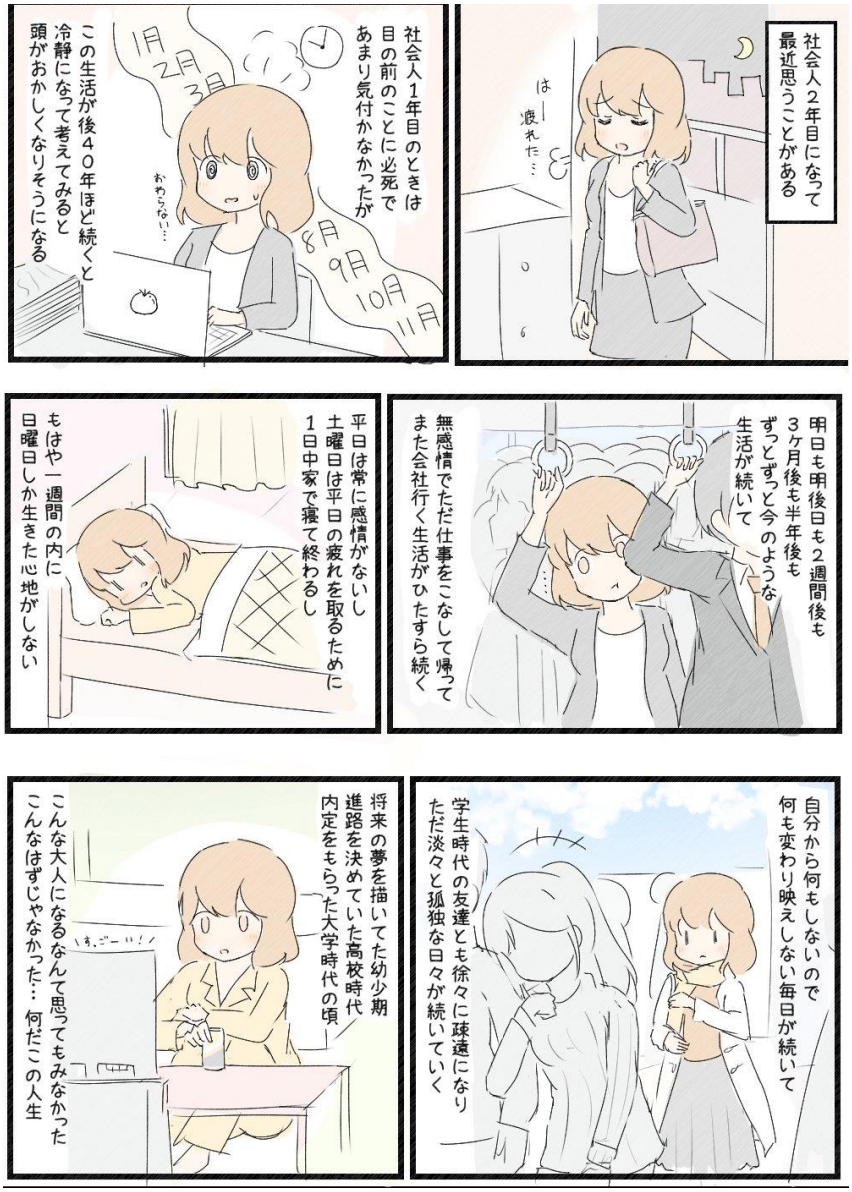

図 1：「労働力」という概念は本質的に近代以降に生まれた概念であるが，マルクスが「人間の最も生産的な能力」であるとしたこの概念は，皮肉なことに現代のさまざまな職業に当てはめることができる。画像は橋本ゆの氏(@riko_3)による 12/5 の Twitter の投稿画像の引用。 元画像は https://twitter.com/riko3/status/1065607014460547072 により閲覧できる（2019 年 1 月 31 日アクセス確認）。

自分の部屋を掃除するときに，前日に乱雑になってしまったものを毎日片づけてきれいにする労力としんどさは，多かれ少なかれ誰もが経験していることだと思うが，奇妙なことに，分業にもこれと同じような特徴を見出すことができる。毎日毎日同じような仕事を続けていき，それを定年まで行っていき一生を終えることの恐怖感は，まさに図 1 に引用した漫画が示す通りなのである。

消費社会

ところで，ハンナ・アーレントは，上記に示した労働社会の特徴を「消費社会」の観点から捉えなおしている。アーレントによれば，「現代が労働社会である」という言葉と「現代が消費社会である」という言葉は，本質的に同じことを示しているという[6]。というのも，労働によって大量に生産される商品は，絶えず消費者によって大量に消費され続けられねばならないからである。ここで最も重要なのは，いまや現代の消費社会においては，本来「自ら生み出す」はずのものであった人間の幸福が，総じて「『商品』として与えられる」ものとなり下がってしまった，ということである。ドイツの心理学者エーリッヒ・フロムは，このような消費社会の特徴について，以下のように述べている。

> 今日の人間の幸福は，「楽しい」ということだ。楽しいとは，何でも手に入れ，消費することだ。商品，映像，料理，タバコ，人間，講義，本，映画などを，人々はかたっぱしから呑み込み，消費する。世界は，私たちの消費欲を満たすための一つの大きな物体だ。大きなリンゴ，大きな酒瓶，大きな乳房なのだ。私たちはその乳房にしゃぶりつき，限りない期待を抱き，それでいて永遠に失望している。いまや私たちの性格は，交換と消費に適応している。物質的なものだけでなく精神的なものまでもが，交換と消費の対象になっている。
>
> エーリッヒ・フロム『愛するということ』[7]（下線は引用者）

上の引用の具体例からも分かるように，現代の消費社会の特性を最もよく示しているのは，近代以降に一般的となった「大衆娯楽」である。このように，現代に生きる多くの人々にとって人生の楽しみの 1 つは，商品，テレビ，酒，ゲーム，アニメ，映画，料理などを，ただひたすら消費することである。いまや現代では，大衆娯楽の蔓延が象徴するように，人生における幸福は「みずから努力して掴み取る」ものではなく，「『商品』として購入する」ものであるという認識が，わざわざ語られることのないくらい自明な事柄となってしまった[8]。

ここには，「幸福」という用語に対する，現代社会の混乱した理解をみることができる。それは，疲労に対する休息・回復に伴う受動的な幸福（快楽[9]）と，社会において与えられた役割をこなしながら，自らの技術と努力で作り上げる能動的な幸福の 2 つに対する混同である。前者の幸福は，たんに生命のリズムを整え，今後の試練に備えて肉体・精神の調子を健康に保つための一時的な幸福にすぎない。それにたいして後者の幸福は，努力に対する達成感と苦痛からの解放感を伴う，より本質的な幸福である。

現代の消費者社会において進行しているのは，上記の 2 つの幸福のうち受動的な幸福ばかりが賛美されている一方で，能動的な幸福はもはや，受動的な幸福と混同され，忘れられつつあるということである。

もちろん，消費すること自体は，まったく悪いことではない。一日の疲れを癒すためにおいしいご飯を食べたり，消耗した心を癒すために寝る前に漫画を読んだりすることは，非常に大切なことである。ところが，現代において進行しているのは，このような受動的な幸福である「消費」が，単なる精神の一時的な休息や回復にとどまらず，ただ「退屈」を紛らわすためだけの手段として用いられている，ということである。今後人工知能（AI）や機械の発達によって労働がこの世から姿を消すとしても，このような消費社会の特性はなくならないどころか，むしろますます増大していくだろう。というのも，労働を失った人々のうち，「人生において

自分が本当にやりたいこと／やるべきこと」を見いだせない大半の人々は，ますます増えていく暇な時間に「退屈」するからである。そのため，彼らは，（特に主体的な幸福を見出せない限り）現代の有り余る娯楽コンテンツの数々を，ただひたすらむさぼり尽くして消費して，一生を終えるしかない。

このように考えると，先の引用でフロムが，大衆娯楽を消費することを「乳房にしゃぶりつく」という比喩で表現している理由がよくわかる。現代は前例を見ないほど物質的に豊かになっているにもかかわらず，消費行動のみによって快楽を得ようとしている人々は，むしろ前例を見ないほど退化しているからである。

以上の議論によって，次のことが結論できる。それは，受動的な幸福に過度に依存する人々は，長期的な目で見れば不幸に陥るということである[10]。というのも，幸福とは，ほんらい自ら努力し，達成し，掴み取る能動的なものであって，受動的な幸福はたんに一時的な快楽にとどまるからである。かくして，まさにアーレントが鋭く指摘したように，「現代社会においては，ほとんど万人が，幸福に暮らす権利をもつと信じており，同時に，自分の不幸に悩んでいる」[11]のである。

画一化へ向かう社会

確かに，ごく最近（21 世紀以降）の大衆娯楽にはかつて無いほどの多様性があり，そのため人々は，これら大衆娯楽の嗜好のわずかな差異によって，自分と他人の区別を感じることができるようになった。ところが，この差異は「個性」と呼ぶには乏しいものであるし，能動的な幸福に至るものではない。そして何より，「消費者」という大きな枠組みからすれば，彼らは同じ存在にすぎない。というのも，両者とも絶え間ない労働と消費のサイクルの渦に飲まれて，消費者社会の狙い通りに消費していることには変わりないからである。このように，消費者社会はすべての大衆に対し，（具体的なコンテンツの多様性はどうであれ）画一的な「消費」を促す。すなわち，消費者社会における多くの消費者は，「幸福に対して受動的である」という面で画一化されていくことになる。このことは，大衆娯楽が多様化した 21 世紀以降も本質的に何も変わっていない。

さいごに，これまで述べてきたことを異なる視点から検討する。ハンナ・アーレントは，著書『活動的生』において，「平等」と「同等」の概念を明確に区別している[12]。まず，「同等」とは，（もともとは古代ギリシャのポリスにおける自由人同士の関係を指すが，）ここで同等と呼ばれる彼らの関係とは，「自由に対話可能な空間において，暴力や命令ではなく，対話によって相手を説得することが可能であるという意味での対等な関係」であった。この空間のもとでは，誰もが傑出した言葉，行い，功績などによって他人から抜きん出ようと努力した。たとえば，彼らはしばしば「いかによく生きるか」「どうすれば人々は幸せになれるか」といった話題について徹底的に議論したことは有名だが，その議論の空間の根底にあったのは，人間の生そのものの問題に関するヒューマニズムであった。アーレントはこのように，他人から抜きん出た卓越性（アレテー）のために誰もが努力した古代ギリシャのポリスについて，「西洋史上今日まで『最も個性主義的』で最も非画一主義的な政治体であった」[13]（強調は引用者）と評価している。

一方で，「平等」（あるいは，近代的平等）という言葉は，「同等」とは全く無関係の概念である。この概念は，近代以降の社会における画一主義に基づいている。このもとでは，ほとんどの大衆は，画一的・常識的な態度ふるまいを備える者とみなされており，他者から卓越して抜きん出ようとする少数の人々は「統計的な」例外とみなされる。また，労働力が社会において賛美されるようになってからは，労働に「卓越性」を期待することは，ほとんど不可能となってしまった。というのも，以前に詳しく触れたように「労働力」は卓越性を含んだ人間ではなく，むしろ常識的で，会社にとって扱いやすい，画一的な態度ふるまいを備えた人々を総じて欲するからである。まさにアーレントが鋭く指摘したように，「社会というものは，いつでも，その成員がたった一つの意見と一つの利害しかもたらさないような，単一の巨大家族の成員であるかのように振舞うよう

要求する」[14]のである。さらに，おびただしい大衆の数のために，たとえ卓越性を持った人物が功績を生んだとしても，それは「社会の進歩」とみなされるにすぎず，注目されることがなくなってしまった。このようにして，社会において称えられるべき功績を持つ人々の大半は，匿名のまま一生を終えるようになったのである。

§2 大衆の他人指向性

「退屈」の問題

市民社会と大衆社会は根本的に異なる社会である。市民社会では，市民が共通の利益や信念によって言論・活動団体を形成しており，これらの団体は民主主義社会における政党に対応する。一方で，大衆社会では，人びとの生命や基本的人権が国家によって保証されており，もはや大衆がこれ以上何を求めて生きていけばよいのか分からなくなっている状態となっている。

前節で述べたとおり，近代以前の社会では，階級制度（これは中世ヨーロッパの階級制度を想像しても，江戸時代の士農工商を想像してもよい）によって，人間にはあらかじめ社会的な役割が与えられており，そのため，その社会的秩序の中で自分に与えられた役割を果たせば，安心感と安堵感を得ることができた。それに対して現代日本のような大衆社会では，階級制度が崩壊し，人々が共通の世界観・価値観を失っているために，大衆が「自分は何を求めて生きていけばよいのか」という確固とした指針が予め用意されていない。そのため，大衆社会のうちで生きる人々は，「退屈」の問題に直面することなしに生きることはできない。「退屈」とは，時間があるにもかかわらず特に為すべきことがなく，そのことに嫌気がさしている状態のことを指す。現代における退屈の回避方法はさまざまである。それは時には，ゲームやテレビ，アニメや漫画であり，友人と無限に世間話をすることであり，カラオケに遊びに行くことであったりする。あるいは，結婚や就職，子育てだったりもするし，自分の趣味に没頭することだったりもする。あるいは，インターネットの掲示板に芸能人や犯罪者の浅はかな悪口を書き連ねることかもしれない。いずれにせよ，現代の大衆のうち，自分が成すべきことを見つけられない大半の人々は，退屈な時間をいかに充実して過ごすのかに苦労するのであり，このことは，近年暇つぶしの手段として，スマートフォンのアプリとして遊べる携帯ゲーム（いわゆる「スマホゲー」）が多くの大衆に受け入れられたことにも表れている。

「文化」の崩壊

以上の議論は，近代における文化の崩壊という側面からも考察することができる。

ほんらい文化とは，人々を共通の慣習，世界観，利害などによって固く結び付け，そこに共通の世界を創り上げるものであった。ところが，近代の西欧では，次第に伝統的な文化（とくに，キリスト教的な世界観）が権威を落とすことにより，結果として，大衆は共通の「世界」を失うことになった。哲学者のニーチェによるかの有名な「神の死」の宣言は，まさにこのような西欧の現状を踏まえたものである。ニーチェは，当時の西欧においてキリスト教的道徳や秩序，世界観がかつてないほどに失墜していることをよく洞察していたが，彼にとってこの事態は，今後次第に人々の間にニヒリズム（「人生に生きる価値はない」とする考え）が浸透することを意味していた。というのも，もはや共通の「世界」を失ってしまい「アトム化」してしまった大衆は，社会のうちで生きる価値を容易に見いだすことができないからである。

このようなニヒリズムの現状は，現代日本においてもぴったりと当てはめることができる。現代日本においても，大衆は共通の慣習，世界観，利害などによって結びついておらず，人々はただ淋しくバラバラに生きているだけである[15]。なお，このことを特徴づける現象の 1 つとして，最近になって毎年 10 月に行われている，

渋谷ハロウィンでのバカ騒ぎの例を挙げておこう。2018 年にはこのバカ騒ぎに乗じた若者によって軽トラックが横転し，破損したことが大きなニュースになったことは記憶に新しい。しかし，昔の日本であればこの軽トラックはお神輿（おみこし）だったのである。この事件を引き合いに出して渋谷に集う若者を批判し満足するのはたやすいが，むしろこれらの現象は，現代社会に生きる若者の生きづらさの一つの表象と捉えるべきである。

このような社会においては，大衆は社会から生きる価値を与えられることはない。そのため，彼らは生きる目的を自分で見つけなければならない。ところが，前節で明らかになったのは，現代の消費者社会に生きる少なからずの大衆は，社会において「自分がやるべきこと／やりたいこと」を見出すことができないために，商品，テレビ，酒，ゲーム，アニメ，映画，料理などをただひたすら消費することで楽しみを見出そうとする，ということだった。フロムの言葉を借りれば，現代人は「機械的な仕事だけでは孤独を克服することができないので，娯楽までが画一化され，人びとは娯楽産業の提供する音や映像を受動的に消費している」[16]のである。現代においては大衆娯楽があまりにも蔓延しているので，そのような点で大衆娯楽は大衆文化と呼べるかもしれない。ところが，ハンナ・アーレントは，大衆文化とは本質的には「空ろな時間をつぶすのに必要な大衆娯楽を目的として，文化が利用され，誤用され，消耗させられている状態」[17]にすぎないことを鋭く指摘している。社会を構成する人々の間で共通世界を生み出さないものは，本来文化と呼ぶべきではないのである。

このように，文化とはほんらい，人々を共通の慣習，世界観，利害などによって固く結び付け，そこに共通の世界を創り上げる公的なものであった。ところが，伝統的な文化が崩壊してしまい，共通世界を失ってしまった現代人が総じてすがり付くものが，ただひたすら大衆娯楽を受動的に消費するだけの私的な大衆文化だったのである。

ちなみに，ごく近年に大衆娯楽の一環として流行り始めたものとして「スマホゲーム」が挙げられるが，この娯楽はあらゆる大衆娯楽の中でも特徴的である。スマホゲームは基本的に，電車の中，授業中などの退屈な時間に，一人で静かにやるものである。そのため，この娯楽はこれまでにないくらい「秘私的」な性質を帯びた娯楽であり，その秘私性たるや，トイレや寝床に負けないほどである。そのため，スマホゲームはあらゆる大衆娯楽の中でも，最も公的な共通世界とはかけ離れおり，そのため最も文化とはかけ離れた，いわば〈最先端の〉大衆文化である。

大衆の他人指向性

ここでは，「退屈」と並んで大衆社会の分析に欠かせない，「孤独」についての考察を行う。ドイツの心理学者エーリッヒ・フロムは，人間にとってもっとも普遍的な欲求は，「孤立を克服し，孤独の牢獄から抜け出したいという欲求」，すなわち「孤独を癒す欲求」であると主張している。そのうえで，彼はこれらの欲求を満たす主な方法を 3 つ挙げている[18]。これら 3 つの方法のうち，現代の（日本のように）高度に文明が発達した大衆社会において，最もよく採用されている「孤独を癒す」方法は，果たしてどれなのか，考えてみることにする。

1 つ目の方法は，「祝祭的興奮状態」である。祝祭的興奮状態は，集団における儀式において，つかの間の高揚状態と集団との融合感が加わることによって生み出される。高揚状態の起爆剤はさまざまであり，かつては自己催眠的な恍惚状態や麻薬の力を借りることもあったが，現代では，アーティストによる LIVE やイベントという形が一般的である（ごく近年に絞れば，前に挙げた渋谷のハロウィンでのバカ騒ぎという例もある）。

2 つ目の方法は，集団における「同調」である。同調とは，周囲の人々の考えや好みにみずからの感受性を重ねあわせることによって，集団にぴったりと寄り付く行為のことを指す。この方法の特徴は，1 点目の祝祭

的興奮状態に比べて，より穏やかで，まるでぬるま湯に浸っているような安心感・ぬくもりを伴うことである。

3 点目の方法は，創造的活動である。人間社会のうちで永続的なものを創り上げることを計画し，生産し，その制作物の行方を自分の目で確かめることは，人間社会における自らの立ち位置を確認することになり，大きな充実感を伴う。生産的活動によって得られる充実感は，これまでの人間同士の一体感による充実感とは一線を画している[19]。

まず，1 つ目の「祝祭的興奮状態」の方法は，少なくとも日常では多くとることができない。というのも，大衆社会において集団で高揚状態に陥るには，あらかじめ外的要因によって指定された場所や機会に従う必要があるからである。これより，現代に生きる大衆は，2 つ目の「同調」か，3 つ目の「創造的活動」のいずれかを選ぶ必要がある。ところが，3 つ目の「創造的活動」を選ぶ場合には，自分がそれに没頭できるほど関心を持った趣味がなければならず，それを見つけることができない大半の大衆（つまり「退屈」な大衆）は，結局 2 つ目の方法を選ぶことになる。実際，フロム自身も，2 つ目の「同調」の方法は，「過去においても現在においても，人間が孤立感を克服する解決法としてこれまでもっとも頻繁に選んできた合一の形態」[20]であると述べている。

このように，「集団における同調」は，現代の大衆社会に生きる人々が，みずからの孤独（さらに，退屈[21]）を癒すためにもっとも採用している手段である。フロムによれば，このように民主主義社会において同調を求める人々は，みずから欲して集団に同調しているにもかかわらず，集団に同調したいという自分の欲求に気づくことができないという。また，彼らは，周囲の人々と意見が一致すると，まるで自分の意見が正しいかのように感じてしまう[22]。彼らは，「集団こそが正しい」という考え方に疑問を呈することが少ないために，集団の意見に無批判に同調しやすいのである。

心理学者のデヴィッド・リースマンは，このような「同調」を求める社会的性格は総じて現代人一般に共通するものとして，「他人指向型」と呼び，さらに詳しく分析している。「他人指向型」の人間は，つねに〈周囲の世界〉に同調しながら，同時代人の承認と指導を求める。なお，ここで〈周囲の世界〉が意味するのは，よく会う友人でもよいし，マスメディアで得た情報でも良いし，ツイッターのタイムラインでも良い。本書ではこれらを総括して〈周囲の世界〉と呼ぶことにしよう。彼らは〈周囲の世界〉の意見に流されやすく，それにつねに注意を払い，自分を同調させていないと不安を感じる。また，彼らは同時代人への承認と指導を求めることも特徴的である。そのため，〈周囲の世界〉の意見に同調しやすい彼らは，往々にして，自らの頭で思考し，判断するといった主体性，自律性を欠いた人間に成長しやすい。

現代日本の若者における「同調」

ここまでは，「他人指向性」をもつ大衆についての一般論であった。ここからは，現代日本に焦点を当てながら，その正当性について具体的に検討することにしよう。現代日本における若者の心理について研究している土井孝義氏（彼は 2016 年度センター試験現代文の第一問における「リカちゃん」でも話題になった人物である）によれば，現代日本における若者の他者とのかかわりには，かつての若者にはなかった以下のような特徴があるという。それは，現代の若者たちの人間関係は，極端に対立や衝突の回避を最優先するということである。土井氏は，このような若者の人間関係を「優しい関係」と呼んでいる[23]。「優しい関係」は，人間関係の対立や衝突の回避を最優先する関係であるために，互いの感受性や信念のずれが表面化することを徹底的に回避する必要がある[24]。そのため，「優しい関係」のうちにある人々は，常に相手との微妙な距離感を保とうと努力し，集団に同調する努力を怠らないように常に注意せねばならない。というのも，一方ではそれに失敗した場合，人間関係が正常に保てない者というレッテルを張られるからであり（「KY」などの用語が若者の間で流

行したのも，まさにこのような背景があった），もう一方では，そのような関係を構築することこそが，彼らの脆弱な自己肯定感を支える大きな源泉となっているからである。

このような若者の人間関係が対外的にみても特徴的であることは，次のように根拠づけることもできる。図 2 は，国連児童基金（UNICEF）によって 2007 年に発表された調査レポートの一部である。図 2 では，UNICEF が各国 15 歳の児童を対象に，上から順に，「部外者であるかのけ者にされていると感じる」，「気まずく，居心地が悪い」，「孤独を感じる」（翻訳は引用者）という 3 種類の質問を行った結果を載せている。

図 2 を見てただちにわかるのは，日本の調査結果において，1 つ目の「部外者であるかのけ者にされている

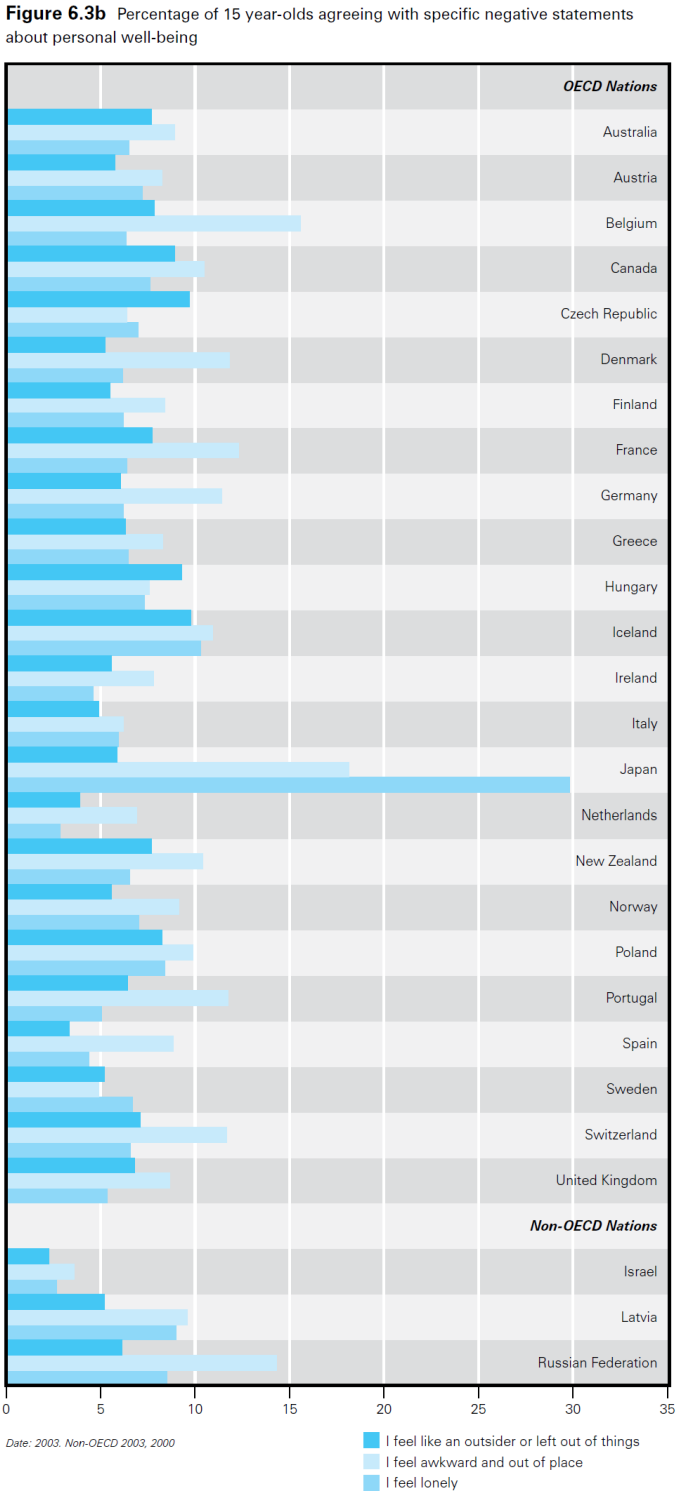

図 2：国連児童基金（UNICEF）による"An overview of child well-being in rich countries"（『富かな国における子供の幸せ』）,2007,P.38 より引用。各国 15 歳の児童を対象に，上から順に，「部外者であるかのけ者にされていると感じる」「気まずく，着心地が悪い」「孤独を感じる」（翻訳は引用者）という 3 種類の質問を行った結果。日本は 1 つ目の質問に同意した割合は世界的にみて標準的であるものの，3 つ目の質問に同意した割合は突出している。PDF は https://www.unicef-irc.org/publications/pdf/rc7_eng.pdf により閲覧できる。

と感じる」という質問に同意した児童の割合は世界標準並みであるものの，3 つ目の「孤独を感じる」という質問には 30%もの児童が同意しており，世界的にみても突出していることである。このような，「のけ者にされているとは感じない」にもかかわらず，「孤独を感じる」子どもたちが日本においてきわめて多いという調査結果について，土井氏は，「日本の若者の孤独感が強いのは，彼らが特段に人間関係から孤立しているからではなく，むしろ人間関係に対する依存度が高く，それだけ関係のあり方に敏感だからだろう」[25]と述べている。

現代のマスコミや一部の人々は，最近の日本の若者は総じてコミュニケーション能力が欠如していると断定することがあるが，実際はそうではない。心理学者の D.リースマンが「他人指向型」として指摘したように，むしろ，彼らは他人の目を無性に恐れている。というのも，彼らは，友人につねに承認を求め，集団につねに自分を同調させていないと，不安を感じるためである（SNS はまさにそのような現代の若者に最適のツールであった）。そのような不安を回避するための対策として，現代の日本の若者は，彼らなりのコミュニケーションを駆使し，微妙な対人関係を作り出し，それにつねに細心の注意を払っているのである[26]。まさに，彼が『孤独な群衆』で述べたように，「ひとがじぶんをどうみているか，をこんなにも気にした時代はかつてなかった」[27]のである。

§3 公的問題への無関心

現代日本の大衆社会においては，大衆は共通の利害で結ばれておらず，政治に関心のない人々が過半数を占めている。このことはもちろん，近年の衆議院議員総選挙や参議院議員選挙における投票率の低さ（50%程度）にも表れているが，とくに近年の 20 代の投票率が 30%程度しかないことは特徴的である[28]。このうち，選挙に投票していない人々のほとんどは，自らが公的問題に無関心すぎるか，あるいは自らは政治に関して中立した立場をとっているために，投票をせず政治に加入しないことで満足しているかのいずれかであると考えられる。

ところが，アーレントが指摘しているように，ナチス・ドイツによるファシズム運動などのヨーロッパにおける全体主義運動の興隆に特徴的だったのは，彼らがまさに政治にまったく関心を示してこなかった大衆からメンバーを集めてきたことである[29]。この現象には説得力のある説明ができる。一般に，公的な事柄について誠実に思考している人間を自分たちと同じ意見に置くことは，多大な労力を伴う。というのも，相手を説得する必要があるからである。一方で，全体主義運動の場合には，ふだんは公的な事柄に何の関心もなく生活を送っている大衆であったために，そもそも相手を「説得」する必要がなかった。相手を説得するには，そもそも相手が自分とは異なる何らかの意見を持っていることが前提となるのであり，何ら意見を持ってない人間を自分と同じ意見に同調させることは，相手を説得することに比べればはるかにたやすいことだからである。

アーレントは『全体主義の起源』において，このような民主政治における「無関心層」が存在することにひそむ問題点を指摘している。アーレントは，「民主制という統治原理は住民中の政治的に非積極的な分子が黙って我慢していることで命脈を保っているにすぎず，民主制は明確な意志表示をする組織された公的諸機関に依存しているのとまったく同じに，意志表示のない統制不可能な大衆の声にも依存している」[30]ことを指摘している。ここでの彼女の指摘から分かるように，我々は次の 2 つの事実をよく認識し，かつ後世にもちゃんと伝えていく必要がある。1 つ目は，民主制の政治原理においては，選挙に投票する人々だけでなく，投票しない「無関心層」も同様に大きく政治に影響を及ぼしていること。2 つ目は，「投票しない」という方法で民主政治に影響を及ぼすことは，非生産的でないどころか，ときに絶対に起こってはならない悲劇をもたらしうるということである。

なお，日本において公的な問題に関心がない人々が増え続けている大きな理由の一つとして，政治的な問題について学校教育でちゃんと教えられる機会がないということが挙げられるだろう。たとえば，日本が直面しているさまざまな現代問題について，それらがどのような内容で，どのような部分が争点となっているのか，そして現在のすべての政党がどのような意見を提示しているのかをそもそも知らなければ，公的な問題に対して興味・関心を持つことも，他人と議論することもできないだろう。このことは，ここ最近，池上彰氏などの著名なジャーナリストが，一般向けに現代問題を分かりやすく説明するテレビ番組が人気を得ていることからも分かる。このことは，公的な問題についてある程度関心を持ちながらも，そもそも基本的な前提知識が足りないために，問題について誠実に考えることができない人々が少なからず存在することを示しているように筆者には思われる。もちろん，これらの番組の人気はとても麗しいことではあるが，そもそも基礎的な内容は学校教育で一度しっかりと教えるべきなのである。もちろん，具体的な教材の記述（これは公平中立でなければならない）についてはさまざまな論争が絶えないだろうが，だからといって学校教育に組み込むことを断念するようなことがあってはならないのである。

§4 まとめ

我々はこれまで，1. 画一化へ向かう社会／2. 大衆の他人指向性／3. 公的問題への無関心 という 3 つのトピックを，3 節にわたって扱ってきた。

これまでを通して結論できることが 2 つある。1 点目に，我々が生きる現代社会においては，「複数性」，すなわち，「自分と異なる感受性や信念を持った人間の存在を認め，互いを理解しながら共生すること」があまりにも軽視されているということである。

ここでもっとも重要なのは，複数性が認められず，すべての人間が単一の態度ふるまいだけが要求される社会においては，そこに生きる人々は必然的に不幸になるということである。現代の労働&消費社会が人々に画一性を要求し，ある種の普遍的な不幸をもたらしていることは既に 1 節で詳しく述べた。同じような傾向は現代人の他人指向性にもみることができ，それは一言で言えば「同調圧力」として説明できる。たとえば，複数性が尊重されない社会では，「しゃべり方」「ノリの良さ」「就寝時間」など，さまざまな事柄に対して正常値を定めてしまうために，正常値から離れている人々は「異常者」とみなされてしまう。このような「異常者」に対して比較的寛容な人がいる一方で，そのような人々を見かける度に，ツイッターなどで悪口を言って気晴らしをする人々も少なくないのが現状である。ところが，このような彼らの言動こそが，現代社会に「生きづらさ」をもたらしていることに，彼らはほとんど気づいていない。

あるいは，このことは友人関係にも当てはめることができる。たとえどれだけ仲の良い親友であったとしても，相手が他者である限り，相手の感受性や信念は，自分とは必ず異なるはずである。それにもかかわらず，自他の感受性や信念の衝突が表面化しないように極力努力しながら，「共感ゲーム」の波に乗り，ぬるま湯につかりながらもどこか本心では居心地が悪いと感じる人間関係を続けていくのか。それとも，相手と自分の差異を互いに理解しながら，それを尊重し，言葉を尽くした人間関係を構築するのか。

2 点目に，現代社会に生きる人々のうちには，「世界が自分の周りだけ」としか捉えられない人々が少なからず存在するということである。彼らにとっては，身の回りの友人関係や，職場関係，そして SNS で得た情報等によって身の回りの世界が構築されており，活動や言論の世界はすべてその外にある。ゆえに，彼らは活動や言論へ関心を持つことがない。活動や言論の世界は，もはや彼らの外にあるのである。もはや彼らにとって，世界とは，毎日会う仲の良い友人でしかなく，通勤の行き帰りで行うスマホゲームでしかなく，家に帰ってからのんびり観るテレビでしかない。――また，近年では，人前では自分の意見をまともに言えないのに，陰で

は（たとえば，SNS では）平気で他人の悪口を書き込むような不誠実な人々が存在する。そもそも，彼らは他者に対して，自らの意見を直接伝えることの誠実性を全く知らないのである。

このような社会においては，人々の「複数性」を尊重し，社会の風通しを良くすることが重要になってくる。そうすれば，社会に生きる人々がもっと自分と他人の信念や思考を尊重し，（共感ではなく）理解した社会を生み出すことができるだろう。そのような社会においては，人々はより自由にみずからの思考や能力を発揮することで，社会における充実感を得ることができる。そして，受動的な幸福のみならず，能動的な幸福がより尊重される社会になるはずである。

それでは，現代社会において「複数性」を取り戻すには，どのようにすればよいのだろうか。本稿では，この問題点の解決法の 1 つについて，「対話」，とくに対話教育という点から考察する。

第 2 章 日本における対話教育

第 1 章では，大衆社会における潜在的な問題点について考察してきた。本章では，「対話教育」に焦点を当てながら，これらの問題点にたいする解決策を考えていくことにする。

§5 小学校における生活指導

日本で生まれ育った人々が小学校に入学してしばらくしてから誰もが気付くことは，そこにおいて生活指導はひたすら「与えられる」ものであるということである。例えば，（学校によって多少の差はあるが）ある小学校では，登校時に靴を下駄箱にしまうときには，必ず靴のかかとを下駄箱の下のふちの部分に必ず揃えなければならない，と学ぶ。これは学校の規則なのであり，いかなる小学生も，これらの規則について異議を唱えれば，彼らは教師に従わない生徒とみなされる。ここで重要なのは，「実際にその学校の規則を破った生徒」だけでなく，「学校の規則に対して〈言葉で〉異議を唱える生徒」までも，同様に教師に従わない生徒であると捉えられ，下手をすれば「彼は問題児である」とみなされるということである。学校の規則はあらかじめ規則として確固として定まっているのであり，それについて反論することすら一切許されないという風潮は，生徒が学校という「社会」の問題点に対して，意見を語ることを根本的に封じる文化を生み出す。これは，民主主義国家において国家権力がどれだけ正常に機能するかは，国民が政治についていかによく思考し，議論するかに本質的に依存していることと対照的である。このように，現代における日本人の投票率の低さや，政治への無関心は，日本における生活指導の在り方が少なからず原因となっていることは明らかであるが，これについてはのちに詳細に明らかになるだろう。

2 点目に，小学校における生活指導には，「すべての人間の感受性は同一である」という前提が隠れていることが非常に多いということである。小学校における生活指導では，「相手の気持ちを考えなさい」という決まり文句がよく用いられる。もちろん，相手の気持ちを考えることは非常に大切なことであり，このことを小学校の生活指導で教えることは必須である。一方で，「相手の気持ちを考えなさい」という行動原理は，次の 2 つの前提によって大きく意味が異なってくる。1 つは，「すべての人間の感受性や信念は同一である」という前提であり，2 つは，「すべての人間の感受性や信念は同一ではないのだから，相手の感受性や信念は（特に道徳的な義務が生じない限り）尊重しなければならない」という前提である。1 つ目の前提は，「自分が他人にしてほしいと思うことを、他人にも同じようにしなさい」というキリスト教の黄金律に対応しており，2 つ目の前提は，「自分が他人にしてほしいと思うことを、他人にも同じようにしてやるべきではない。その人の好みが自分と一致するとは限らないからだ。」というバーナード・ショウの言葉に対応している。

1 つめの前提に立った場合，子どもたちは「日本社会においては，誰もが持つべき共通の感受性があり，その感受性はあらかじめ確固として定まっている。我々はそのもとで集団につねに同調しながら生きていかねばならない。」という人間観を自然に身に着ける。そして，彼らは次第に集団に同調しながら生きていくようになる。一方で，2 つめの前提に立った場合，子どもたちは「自分と相手の感受性や信念の差異を認めたうえで，相手の気持ちを考慮し，それを尊重するべきだ」という人間観を身に着ける。そして，彼らは次第に，たいていの状況において，相手が固有にもつ感受性や信念を積極的に理解しようとし，それを尊重するような能力を身に着けるようになる。

日本型の小学校教育について特筆すべき 3 点目は，小学校教師が生活指導において，しばしば「けじめ」と

いう用語をまるで標語のように用いている一方で，彼らはその「けじめ」という言葉が具体的に何を意味するか何も正確に語らないということである。むしろ彼らにとって「けじめ」とはあらかじめ確固として定まっているものであるから，一般の生徒も，それが何なのかあらかじめ「語ることなく」気づかなくてはならない。そのために，彼らにとってそれを言語化しなければならないことほど疎遠なことはない。このような教師の態度に影響を受けながら，生徒は次第に，「自分の考えを正確に言語化し，議論すること」の無意味性を学んでゆく。わざわざ生徒が思考して議論しなくても，あらかじめ「けじめ」は教師によって定められているからである。

このように，生徒たちは，小学校の生活指導を通じて「自分の頭で主体的に思考し，社会をよくするために言葉を尽くして徹底的に議論する風土」を完全に喪失し，成長していくことになる。哲学者の中島義道氏は，このような問題点について，「言葉の無力さ」という観点から考察している。

> 私は，日本社会は，子どものころに言葉の無力さを徹底的に教える社会だと思っております。何かを語らせて反対するのではない。語らせないようにする社会なのです。全体の空気を察して，言葉以上のものによって動くことを要求する社会なのです。
>
> 中島義道『哲学の教科書』[31]

彼がここで述べる「言葉の無力さ」とは，具体的には「集団の秩序を最優先し，個人の声を聞くことがない」という意味であろう。集団内部の秩序を何よりも大切にしようとしたとき，「言葉の大切さ」は完全に失われるのである。一方で，この文章において中島氏は，たんに生活指導の教育現場に限らず，日本の精神文化そのものに「全体の空気を察して，言葉以上のものによって動くことを要求する」風土が形成されていることを指摘している。このような「集団の秩序と安泰を重んじる」日本固有の精神文化は，よく和の精神と呼ばれることがある。

§6 日本の精神文化と「対話」

我々は前節で，「言葉の無力さ」という観点から，日本の精神文化の否定的側面を目の当たりにすることとなった。ここでは，日本の精神文化一般について「対話」という側面から客観的な考察をする。

評論家の加藤周一氏は日本の精神文化について，「ムラ社会」という原理を出発点として，以下のように考察している（引用が少々長くなってしまうため，適宜「……」を用いて省略する）。

> 「ムラ」集団の第一の特徴は，そのなかでの confornism です。みんなが一緒に同じようにしたい。……みんなが同じようなことをして，同じような意見を持つのが理想です。第二の特徴は，意見の一致が理想だから，少数意見は望ましくない。少数意見の存在は，不幸な事故とみなされ，極端な場合には，そういう意見をもつ成員を集団の外に追い出す。村八分にするわけです。
>
> ……第四の特徴は競争です。……日本の社会は，他の多くのアジアの社会と，どういう点で違うか。それは今日の日本の集団が激しく競争的だということではないでしょうか。まず集団相互の競争が激しい。たとえばニッサンとトヨタ。東京大学と京都大学。……またその目的を達成するための手段または手続きについて，明瞭な規則がある。日本の典型的な集団はどれも，スポーツの場合と同じように，何らかの領域で同じ目標を認め，特定の規則に従って，その目標を達成しようとして競争している。そうすることが，集団の活動を支える主要な動機です。
>
> 加藤周一「I 日本社会，文化の基本的特徴」より[32]（下線は引用者）

上の引用には，日本における集団の特性についての重要な考察が含まれている。まず，日本社会は，「みんなが同じようなことをして，同じような意見を持つ」ことを理想とし，「少数意見は望ましくない」と考える。このような日本の精神文化の特徴は，現代でも多くの場面で垣間見ることができる。たとえば，加藤氏は上の引用とは別の箇所で，駅での放送の例を挙げている[33]。日本の地下鉄では，よく「ドアが閉まりますから，挟まれないようにご注意ください」という旨の放送を頻繁に聞くことがある。しかし，加藤によれば，日本以外の社会ではこのような放送は普通わざわざ行われない。ましてや「挟まれないようにご注意下さい」などというのは，「おそらく幼稚園の遠足の場合に限るでしょう」と，彼は皮肉交じりに指摘している。この例は，「みんなが同じようなことをして，同じような意見を持つ」ことを理想とする日本の精神文化をよく表している。なお，日本社会ではこのような「お節介放送」以外にも，注意喚起の看板や，「やさしさの 心がつなぐ 防火の輪」といった標語の看板，そして「わたしたちは『あいさつ，出会い』を大切にした駅づくりに努めます」といった，聞き心地の良い看板を非常によく見かけることができる[34]。このような日本社会の特徴は，「みんなが同じようなことをして，同じような意見を持つ」ことを理想とする日本の精神文化をよく表している。

一方で，引用の後半では，日本の精神文化の目的指向性と，それに伴う激しい競争に言及している。ここで重要なのは，その競争が「何らかの領域で同じ目標を定め，特定の規則に従って」いるという点である。すなわち，日本における集団間あるいは集団内の競争は，無秩序で自分勝手な競争ではなく，比較的統制の取れた競争である。

なお，加藤氏は，このようなことが可能なのは，日本社会が「集団主義的社会」と「目的指向性」をともに兼ね備えているためと説明している。加藤氏は「個人主義的社会」と「集団主義的社会」を大まかに区別している。ここで「個人主義的社会」は主に北アメリカと西ヨーロッパに当てはまり，アジア全般は「集団主義的社会」に当てはまる。日本社会は，「集団主義的社会」に属しながら「目的指向性」を持っているという，アジアでは少し珍しい国なのである。

ここで言及しておくべきなのは，「対話」という観点からみたときに，北米や西欧の「個人主義的社会」が「集団主義的社会」に比べて必ずしも優れているわけではないということである。中島義道氏は，欧米の「個人主義」と呼ばれるものの否定的側面に関して次のように述べている。

> 私は，ある意味で我が国以上の悲惨な状態にある欧米各国の現実を知っているつもりです。ドイツやアメリカでは際限のない自己主張に基づく訴訟の山が，社会の人間関係を阻害しているところまで達している。誰も彼もが相手に降伏するより勝とうとする。たとえ相手に一分の理屈があることがわかっていようと，「勝つ」ためにそれを握りつぶす。そして，自分の落ち度がわかっていても「勝つ」ためにそれを押しつぶす。
>
> 中島義道『哲学の教科書』[35]

上の引用で明らかなように，北米および西欧の「個人主義」と呼ばれるものの問題点は，しばしば正しさよりも「自分の意見を押し通す」ことに力点が置かれてしまうことにある。このことは，英米の教育現場を中心にしばしば行われている「ディベート」(debate)の特性にもよく表れている。ディベートとは，公的問題についてあらかじめ「肯定側」と「否定側」に分かれて討論を行う議論形式のことを指す。このとき，「対話」という観点から眺めたときディベートに潜む最大の問題点は，そもそも「肯定側」と「否定側」に分かれて議論を行うために，参加者は討論中において主張の立場（肯定／否定）を変えることができないことである。のちに詳しく示すように，参加者が本当に「正しさ」を求めて議論しているならば，議論の進行に応じて参加者が立場を変えることは認められなければならない。というのも，議論を行うすべての人々がいつまでも自分の主張

に固執するようになったとき，「正しさ」は完全に見捨てられるからである。

このように考えると，「対話」の観点から見たとき，日本の精神文化は必ずしも否定的な側面のみを持つわけではないことがわかる。むしろ，前述したように「集団主義的かつ目的指向型」の日本社会の競争は，比較的統制の取れた競争であるために，集団において共通の理念さえ共有できれば，「対話」はむしろ促進していくことになる。

§7 「対話」とは何か

さて，これまで「対話」という用語の意味については，特に定義することなく用いてきた。そこで，本節では，本章の主題である「対話」が具体的にどのような形態を指し示すのかを，「対話」に必要な 3 つの条件として述べることにする。

「対話」に必要な 1 つ目の条件は，「対話」を行うには，集団のうちで自分の身体をさらけ出して発言するための「場」がなくてはならないということである。そもそも，「『正しさ』を求めるためには徹底的に議論することを厭わない」という信念を持った人々が集まらなければ，「対話」は始まることすらないだろう。

ある人物が議論の場において発言をしたとしよう（この「議論の場」とは，議会の討論の場でも，学校の PTA でも，哲学カフェでも，何でもよい)。このとき，まず，その人は集団に対して，自らがどのような人物かを明らかにしている。すなわち，その人がどのような肉体の持ち主で，どのような口調でどのような意見を発するかを参加者にさらけ出している。これによって彼（女）は，自らの人柄，感受性，信念を，集団のうちであえて暴露するのである。そして，その人は議論の参加者に対して自分の身を暴露しているために，他人の質問や批判を引き受けねばならない。このように，「対話」を行うためには，発言者それぞれが，自らの身体を集団のうちで晒して発言し，他人の質問や批判を引き受ける責任を持つための「場」が存在しなくてはならないのである。

2 つ目の条件は，「対話」において全員が追求するべきなのは「正しさ」であり，「自分の意見を押し通す」ことではないということである。いつまでも自分の意見に固執しており，相手の批判や反論を聞く精神をまったく持たない人々が集まったとき，真の意味での「対話」は崩壊する。一方で，参加者全員が（自分の意見に固執することなく）「正しさ」を求めて議論する場合には，その議論は「共同作業の場」となり，「主張の押し付け合いによる闘争の場」ではなくなる。このように，「対話」とは共同作業なのである。

そして最も重要な 3 つ目の条件は，ある人物が「これまでの自分の主張は間違っていた」と認識した場合，「自分は間違っていた」と参加者全員に告白することを，全員が認めることである。先ほど述べたように，「対話」において重要なのはあくまで正しさの追求であり，自分の意見を押し通すことではない。そのため，誠実に正しさを追求している人々ならば，途中で「自らの考えは誤っていた」と認め，意見を転じることは，少なからず生じ得ることである。そのため，「私の意見は間違っていました」という告白を，周囲の人間が肯定的に受け止める共通意識が必要である。

§8 生活指導の改善点

4 節では，日本の生活指導教育に関する問題点を指摘してきた。ここでは，前述の問題に対する改善策について考えてみることにする。

哲学者のイマヌエル・カントは，論文『啓蒙とは何か』において，次のように述べている（これは，カントが当時のプロイセン君主であったフリードリヒ二世への批判を暗に込めて述べた一節であるが，今回我々が注

目したいのは，最後の下線部のみである)。

> 自ら啓蒙されていて，わけの分からない不安におびえることのない君主，しかし同時に公共の治安を守るために訓練された多数の兵士を擁している君主だけが，公共国といえどもあえて語る勇気の持てない次の言葉を語れるのである。「好きなだけ，何ごとについてでも議論せよ。ただし服従せよ。」
>
> イマヌエル・カント『啓蒙とは何か』[36]（下線は引用者）

この「好きなだけ，何ごとについてでも議論せよ。ただし服従せよ。」という言葉は，ある重要な原理を選定としている。それは，「集団秩序に対する個人の服従」と，「言論の自由」は切り離して考えなくてはならないということである。今節と次節で明らかになるように，これは対話教育においてきわめて重要な指摘であり，かつ現在のほとんどの教育現場において見落とされている指摘である。さて，この言葉を，学校の生活指導の現場に応用してみよう。すると，次の①～④のような具体的な規則ができ上がる。

① 生徒は，学校のルールや教師の指示には，必ず従わなくてはならない。
② ただし，生徒は現状に不満がある場合，教師を説得することができる。この場合，教師は当該生徒の主張が単なる感情的なお願いではなく，論理的に説得力を持った主張であるかよく見極める。
③ 教師は，当該生徒の主張が誤っていると判断した場合，生徒に反論することができる。
④ 教師は，当該生徒の主張が正しいと判断した場合，生徒の主張を認める。

ここで重要なのは，②，③である。生徒は，学校という「社会」の現状に不満がある場合，教師を説得することができる。ところが，教師は，生徒の主張が十分正しいと認めない限り，生徒の主張を認めることはない。そこで生徒は，自分の意見に説得力を持たせ，教師を説得させるために，次第に論理武装をするようになる。このプロセスが非常に重要である。この①～④の規則のもとでは，権力を行使するのは教師でありながら，言論の世界では教師と生徒は完全に同等である。

ここで，1 つ具体例を挙げることにする[37]。「ある学校のクラスでは，クラスの生徒の一部から，「教室の机の配置をコの字型にしよう」という提案があった。彼らは，この提案をクラスの担任に提案したところ，担任はそれに反対した。そこで担任は，彼らに対して『もし本当にそうしたいのであれば，私を十分納得させるような理由を提示しなさい』と述べた。結局，生徒たちは副担任を説得させるための十分な主張が用意できず，教室の机の配置をコの字型にするのは叶わなかった。」

上の例では，結局生徒は教師の説得に成功することはできなかった。しかし，教師が生徒の主張を認めなかったのは，教師が生徒の意見を「押しつぶした」からではなく，むしろ「生徒が自らを納得する根拠を提示できなかった」ためである。そのため，この例は対話教育としては望ましい例といえるだろう。この例と同じように，実際の学校現場では，おそらく生徒が教師を説得させることに成功する可能性は低めであると考えられる。しかし，最も重要なのは，「生徒が教師に対して自由に意見を述べることができる」という風土を学校全体に構築することである。そのため，生徒と同様，教師も「言葉を大切にする」ことの重要性を，態度ふるまいで生徒に伝えていかなくてはならない。このように，社会をよくするために議論することの重要性を生徒に認識させるための最もよい方法は，生徒は教師の指示に服従する存在であることを維持しつつ，言論の下では教師と生徒を同等の関係に置くことである。

§9 道徳教育と対話教育

さいごに，道徳教育と対話教育のかかわりについて簡単に考察して，本章を閉じることにする。

カントは，人類の歴史の発展は，人間の「社交的な特性」だけでなく，「非社交的な特性」も存在して初めて可能になると主張している（これらを合わせて彼は「非社交的な社交性」と呼ぶ)。この 2 つの概念は，我々が道徳教育の理想的な在り方について論じる際に，大きな道筋を与えてくれる。

> 自然が人間のすべての素質を完全に発達させるために利用した手段は，社会においてこれらの素質を互いに対立させることだった。やがてこの対立関係こそが，最終的には法則に適った秩序を作り出す原因となるのである。対立関係という言葉はここでは人間の非社交的社交性という言葉で理解していただきたい。これは，人間が一方では社会を構築しようとする傾向を持つが，他方では絶えず社会を分裂させようと，一貫して抵抗を示すということである。
>
> ……しかしこうした非社交的な特性がなければ，人々はいつまでも牧歌的な放羊生活をすごしていただろう。そして仲間のうちで完全な協調と満足と相互の愛のうちに暮らすことはできても，すべての才能はその萌芽のもとに永遠に埋没してしまっただろう。
>
> イマヌエル・カント『世界市民という視点からみた普遍史の理念』[38]
>
> （強調は原著者，下線は引用者）

人間の「社交的な特性」とは，集団に同調して，平和に暮らそうとする人間の傾向性のことである。一方で，人間の「非社交的な特性」とは，他人や集団に一貫して抵抗しようとする心の傾きのことである。上の引用の後半にあるように，もし，人間に「非社交的な特性」が欠けていれば，人類は永遠に平和に生きることはできても，まるで牧場で暮らす家畜のように，社会を発展させ歴史を築き上げることはできないだろう。それとは逆に，もし人間に「社交的な特性」が欠けていれば，人類は永遠の闘争状態を繰り返すままで，共同体を築き上げることすらできなかっただろう。まさにカントが述べるように，人類の歴史は実のところ人間の「非社交的な社交性」によって築き上げられているのである。

以上の考察から，次のことが結論できる。今までの道徳教育では，生徒たちを「法の秩序や集団のルールに従わせる」ことに力点が置かれていたが，それでは不十分であるということである。というのも，道徳教育はすべての生徒に法の秩序や集団のルールに従うよう求めるが，そのような教育のみを一方的に続けていくことは，（平和な家畜まではいかないとしても）政治や公的問題に無関心な大衆と，同調圧力が極度に強い社会を生み出すことにつながり得るからである。

それでは，どのように道徳教育を見直せばよいのだろうか。我々は前節で，「集団秩序に対する服従」と「言論の自由」は切り離して考えなくてはならない，という重要な原理を学んだ。ここですぐに結論できるのは，今までの道徳教育では前者「集団秩序に対する服従」のみが重視されており，後者「言論の自由」が全く重視されていないということである。以上の議論からわかるように，道徳教育に対話教育を組み込むことは必要なことであり，そのため道徳教育全般について考えるうえで，対話教育を抜きに考えてはならない。

道徳教育に対話教育を組み込むとき，道徳教育は以下の 2 点を守るべきである。

1 点目に，道徳教育は生徒に，「言葉の大切さ」を伝えなくてはならない。すなわち，自分の意見を相手に（暴力や雰囲気ではなく，）正確な言葉によって伝えること，そして，相手の意見を誠実に聞くことの大切さを伝えなくてはならない。

たとえば，日本の教育から例を挙げれば，『私たちの道徳』中学校版 P.72-81 では，「他人の立場や考えを尊重し，認め合い，学びあう」ことの大切さが記されている。もちろんこれは大切なことである。しかし一方で，

他人の立場や考えを尊重し，認め合い，学びあうために最も有効な手段は，「言葉を大切にすること」である点については，全く言及されていない。それどころか，教科書には「多くの人と出会い，関わり合う中で，自分では気づかなかった周囲の人のものの見方や考え方に謙虚に学ぶ」（P.75，強調は引用者）と記されている。ここで述べられている「謙虚」というのがもし「他人の信念や感受性になるべく干渉しない」という意味であるならば，それは「言葉を大切にする」ことには全く結びつかないし，せいぜい土井氏が以前に指摘した「優しい関係」にとどまるものでしかないだろう。

あるいは，同書 P.226-229 では，情報化社会にひそむ問題点として，インターネットにおける悪意のある書きこみや，ネットいじめといった問題点について生徒たちに注意を促している。これももちろん大切なことである。だがやはり一方で，「他者に対して，自らの意見を直接相手に伝えること」の誠実性について教えることはない。ある人物にもしも不満があるのなら，それは直接本人の目の前で意見を伝えればよいのであり，そのため，「人前では自分の意見をまともに言えないのに，ネットでは平気で他人の悪口を書き込む」ことが不誠実であることは，すぐに分かるはずである。同じようなことは他の様々な事例にも適用できるのであり，このように考えると「言葉の大切さ」を伝えることは，様々な道徳教育の内容を統一的に説明することができる。

2 点目に，道徳教育において用いる題材は，決して誘導尋問的な記述をしてはならず，生徒に自律的な思考を促さなくてはならない。すなわち，一見生徒たちに主体的な思考を促すような形式をとっていながら，実際は彼らに画一的な答えしか要求していない，といったことがあってはならない。このような教育法は，生徒たちの主体性を奪う上に，同調圧力に従うような精神性を養うような結果につながりかねない。

たとえば，日本における道徳教育の例を挙げれば，道徳教育のテキストである『心のノート』の記述は誘導尋問的であった[39]。『心のノート』は一見すると多くの書き込み欄や問いかけが存在し，生徒たちがみずから考えるようなスタイルを取っているように思えるが，よく読んでみると，作成者側は画一的な答えのみしか要求していないことに気づく。もし生徒たちに教えるべきことがあるのならば，それは言葉ではっきりと直接記述すればよいのであり，わざわざ誘導尋問的なトリックを用いる必要はまったくないのである。

脚注

[1] エーリッヒ・フロム『自由からの逃走』東京創元社，日高六郎訳，P.53 を参照。
[2] 現代に比べて，当時の家事は相当に根気が必要な作業だったと考えるべきである。たとえば，洗濯に関して言えば，現代日本では洗濯機を回して，洗濯が完了したらそれを干すだけでよいが，洗濯機が発明される前の時代では，洗濯はすべて 1 枚 1 枚人間の手によって行われる必要があった。あるいは，冬場の暖房に関して言えば，現代日本ではきわめて便利なストーブがあるが，一方で，昔は暖炉や煙突の管理は大変なものだった。
[3] 古代～中性までの奴隷と，産業革命以降の奴隷は本質的に区別して考えなくてはならない。前者の奴隷は，私的な領域における仕事を引き受ける奴隷であり，当時は，人間が生きていくために必要な労働のうちでもっとも卑しい労働を担う人間とされた。一方で，産業革命以降の奴隷は，本質的に富と利潤を生みだすためだけの存在であり，人間扱いすらされないこともあった。ハンナ・アーレント『活動的生』みすず書房，森一郎訳，P.101（あるいは P.141）を参照。
[4] ハンナ・アーレント『活動的生』みすず書房，森一郎訳，P.105。
[5] 「制作は，対象物がそれに適合した形態を得て，完成したものとして既存の物の世界に組み入れられうるようになれば，終りに達する。そのような政策とは違って，労働の場合，『完成』されることは決してなく，無限に反復され，繰り返し同じ円を描いて回転運動する」（ハンナ・アーレント『活動的生』みすず書房，森一郎訳，P.117）。
[6] ハンナ・アーレント『活動的生』みすず書房，森一郎訳，P.151。
[7] エーリッヒ・フロム『愛するということ』紀伊国屋書店，鈴木晶訳，P.133。
[8] なお，この主張は，現代になって大いに認められるようになった自由恋愛の問題にはまったく当てはまらないのではないかと反論する者がいるかもしれないが，そうではない。エーリッヒ・フロムによれば，近代においては，自由恋愛においてパートナーを選ぶことが，あたかも市場のうちで「商品」を選別することと同じ枠組みで考えられがちだという（エーリッヒ・フロム『愛するということ』紀伊国屋書店，鈴木晶，P.15-16）。このような状況下では，各人は，恋愛において「商品」として高い価値を付けられるためには，ひたすら「愛される技術」を磨かなくてはならない。このことは，近年の日本で，女性を中心に言われる「愛されメイク」「愛されコーデ」等の言葉にもよく表れている。このようにして，フロムが恋愛において最も重要だと考えた「愛する技術」は，現代社会においては「愛される技術」に代わって軽視されてゆくのである。
[9] 消費者社会を賛美する人々の立場からすれば，これは「快楽」と呼ぶにふさわしいものだろう。というのも，量的功利主義の立場からすれば，受動的な幸福は彼らにとって計算可能だが，能動的な幸福は明らかに計算不可能だからである。そのため彼らは，受動的な幸福のみによって，社会全体における「快楽の最大化」を目指すのである。
[10] ハンナ・アーレント『活動的生』みすず書房，森一郎訳，P.159-160。
[11] 同書，P.159-160，P.159。
[12] ここから下の 2 段落は，ハンナ・アーレント『活動的生』みすず書房，森一郎訳，第 6 節「社会の成立」の内容を参考にしている。
[13] 同書，P.55。
[14] ハンナ・アーレント『人間の条件』ちくま学芸文庫，志水速雄訳，P.62。
[15] このような現代日本の現状をよく象徴しているものとして，動画サイト「ニコニコ動画」におけるコメント表示機能を挙げることができる。ニコニコ動画では動画を視聴した際に，再生と共に映像の右から左へ投稿者のコメントが流れるが，彼らは別に，共通の利害や伝統文化，信念などによって結びついているわけではない。そのため，そこでは人々の個人的で雑多な意見が，まるで洪水のように流れているのであり，そのため動画の視聴と共にこれらのコメントすべてに目を通すことは，もはや不可能である。とはいえ，彼らは別に他人に興味があるわけでもないので，コメントすべてに目を通す必要もない。このように，大衆社会とは，おびただしい数の大衆がひしめき合いながらも，彼らは公的なものについてほとんど関心がなく，ただ「自分の周りの世界」のうちにとどまっている状態のことを指す。
[16] エーリッヒ・フロム『愛するということ』紀伊国屋書店，鈴木晶訳，P.132。
[17] ハンナ・アーレント『活動的生』みすず書房，森一郎訳，P.159。
[18] エーリッヒ・フロム『愛するということ』紀伊国屋書店，鈴木晶訳，P.22-37。
[19] ただし，フロムははっきりと述べてはいないが，ここで述べられている創造的活動は，かならず熟練の技術に基づいていなくてはならない。というのも，画家であれ，大工であれ，農民であれ，一定の熟練技術が要求されるのであり，それによって本人の製作行為に誇りが生じるからである。これに対して，前節で詳しく述べたように，工場における単純労働者はこれには当てはまらない。いくら製作行為とはいえ，その人が作っているのは，安価で均一な製品であり，またその人は会社組織にとって熟練者ではなく，たんなる労働力にすぎないからである。
[20]土井氏は『友だち地獄――「空気を読む」時代のサバイバル』ちくま新書，2008，P.29 でこう述べている。
[21] 退屈と孤独という 2 つの概念は，もちろん本来異なる概念である。ところが，本文で述べているように，退屈とは「人生においてやるべきこと／なすべきことが見つけられず，暇を持て余している状態」を指す。このような人々は，フロムが述べる「3. 創造的活動」の方法をとることができないために，結局 2 の選択肢を取ることになるのである。

[22] 同書，P.31。
[23] 同書，P.8。
[24] 同書 P.43。
[25] 同書 P.121。
[26] 同書 P.47 を参照。あるいは，同様の意見が中島義道『不幸論』にもある。「多くの大人が最近の若者は『自分のことだけしか考えない』と非難するけれど、そうではない。彼らは他者の目を無性に恐れており、他者の承認を求めている。互いにジコチューをきびしく監視し合っている。他人のジコチューを告発する分だけ自分のジコチューも抑えつけている。」（中島義道『不幸論』PHP 文庫，2015，P.137）。
[27] D.リースマン『孤独な群衆』みすず書房，加藤秀俊訳，上巻 P.113。
[28] 総務省公式ホームページより。PDF は http://www.soumu.go.jp/main_content/000255967.pdf で閲覧できる。
[29] ハンナ・アーレント『全体主義の起源』みすず書房，大久保和郎・大島かおり訳，第 3 巻 P.11。
[30] 同書第 3 巻 P.13。
[31] 中島義道『哲学の教科書』講談社学術文庫，2001，P297。
[32] 加藤周一ほか『日本文化のかくれた形』岩波書店，2004，P21,23-24。
[33] 加藤周一ほか『日本文化のかくれた形』岩波書店，2004，P18。
[34] 中島義道『〈対話〉のない社会』，PHP 新書，1997，P.50-63 を参考にしている。あるいは，中島義道『うるさい日本の私』（角川文庫，2016）全文を参照。
[35] 中島義道『哲学の教科書』講談社学術文庫，2001，P300。
[36] イマヌエル・カント『啓蒙とは何か／永遠平和のために』光文社古典新訳文庫，中山元訳，P.25。
[37] 実はこの具体例は，筆者が高校一年のとき別のクラスであった実話である。
[38] イマヌエル・カント『啓蒙とは何か／永遠平和のために』光文社古典新訳文庫，中山元訳，P.40,42。
[39] 三宅晶子『「心のノート」を考える』岩波ブックレット，2003，P.28-32。または，斎藤貴男『安心のファシズム』岩波新書，2004，P.90。